

# ものの見方・ とらえ方を変える

私たちは自分中心に物事を考える傾向があります。しかし、それを相手や第三者の立場からの見方に変えてみるとどうでしょう。自分の視野が広がって新たな発見があるかもしれません。





# 「富士山を」

# イメージづくりでわくら」



ある会社で、「新しい能力の発見」と題した社内研修会が開催されました。その研修会の冒頭、講師は参加者に次のような課題を出しました。

——皆さん、富士山をイメージしてください。そして、その形をノートに描いてください——

参加者の多くは、新幹線の車窓から見られるような横から見た富士山の絵を描きました。ていねいに山頂に浮かぶ雲を描き添えた人もいました。ところが、中には富士山を真上から見下ろした山の形をイメージして、「◎」（二重丸）と描いた人もいました。

講師が出したこの課題は、「発想の視点を変えるヒント」として古典的な手法の一つです。観察者の視点が横から眺めたものなのか、あるいは上空から見下ろした眺めなのか、どこに置かれているかによって、対象となる富士山自体の形は変わらないのに、その見え方やとらえ方がまったく異なってくるということを分かりやすく示した例だと言えます。

このことを私たちの日常に置き換えて考えてみるとどうでしょうか。私たちのものの見方やとらえ方という判断の基準が変わると、物事の受けとめ方は、どのように変わるのでしょうか。

# コピーは雑用？

出版社に勤める宮脇さん（35歳）が、まだ新米の編集者だったころの話です。



学生時代から本好きだった彼は、念願の出版社に入社し、将来、自分の編集した本が書店に並ぶことを夢見て仕事に打ち込んでいました。入社して一、二年がたったころには、何冊かの本の編集を手がけ、ますます仕事にやりがいを感じていたのでした。そんなある日、宮脇さんが入社するとすぐ編集長に呼ばれました。

「今日の午後、今度出版する家庭教育の論文集の内容検討会議を、著者の先生方を交えて行うから、午前中にこの原稿を必要部数コピーしておいてくれ」

原稿は、家庭教育の専門家五名がそれぞれに書き下ろしたもので、原稿用紙で一人約五十枚、全部で二百五十枚程度の

枚数がありました。社内の編集担当者を加えると全員で七名となり、相当の枚数のコピーを取る必要がありました。

宮脇さんは、「分かりました」と返事をしたものの、内心は、「ちよつと待つてくれよ。俺だつて今抱えている仕事で一杯で忙しいんだよ。それにどうして自分がこんなコピーみたいな雑用をしなくちやいけないんだよ。もつと暇な人間がいるだろう」という不平不満が彼の心の中でモクモクと広がっていたのでした。

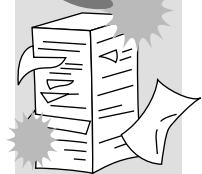
すぐさま彼はコピー室に走りまわりました。しかし、その心には「とにかく手早く片付けて、自分の仕事に戻ろう」という思いしかありませんでした。

ところが、当時の社内にあつたコピー機は紙詰まりを起こしやすく、思いのほ



か時間がかかりました。やつとの思いでコピーを取り終えた宮脇さんは、確認もほどほどに会議室に届けたのでした。そして、編集長への報告もせず、中断していた仕事に急いで取り掛かったのです。

# たかがコピー、されどコピー



その一時間後、再び編集長から呼び出されました。そして、いきなり一喝されたのです。

「宮脇！ このお粗末なコピーの取り方はなんだ！ 何箇所もページが抜けてい

たり、重なっていたり、原稿が途中で切れているページも何枚もあるじゃないか。

著者と最終的な確認をする大事な会議にこんなコピーを配ったら、参加者が戸惑って、会議がスムーズに進まなくなるのは目に見えているだろう。それぐらいのことが分からないのか！

それに、仕事というものは終了の報告があつて初めて完了するんだ。報告があればすぐに確認もできて、余裕を持ってやり直しもできたはずだ……。

もう時間がないから、昼休み返上でやり直した」



編集長のこの厳きびしい言葉に、宮脇さんは身を強張こわばらせました。入社当時、先輩せんぱいから聞かされた「打ち合わせは大切にしろ。著者との意思疎通いしそつうが編集の基本だ」という言葉を思い出し、「大変な失敗をした」と強く感じたのでした。

宮脇さんは、その出来事がきっかけで自分の考え方が変わったと次のように言います。

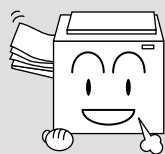
「ぼくは、編集長のあの一喝で目が覚さめた思いがした。一人前の編集者気取りで、自分の仕事のことしか頭になくて、周りのことなどまったく関心がなかった。〃若手の中では俺がいちばん仕事ができる〃なんて思いついていたんだな。

だから、あのとときも〃こんな雑用はとにかく早く片付けて、すぐ仕事に戻ろう〃



としか考えてなかった。あのととき、編集長が一喝してくれていなかったら、いつまでもそんな自己中心的な仕事の考えから抜けきれなかったと思う。たかがコピー、されどコピー。〃コピーは雑用だ〃なんて、とんでもない思い違いをしていたんだ」

# ものの見方が変わると 仕事が変わる



宮脇さんは、それ以来、三つの約束事を決めました。

① コピーを取るといふ仕事をおろそかにしない。

② 受け取る相手に満足してもらえらるうに、枚数や抜け、重なりがないかをしっかりと確認する。

③ コピーが終わったらず上司に報告する。

「そうした心がけを自分なりに続けていたら、不思議なもので、コピーの受けとめ方が変わってきたんだ。コピーなら私

にらせてください」といふ『小さな誇り』といつたら大げさだけど、そんなふうにも感じるようになってきた……」  
そう語る宮脇さんです。

「雑用」といふ名の仕事はありません。その仕事を雑用と思うかどうかは、私たちの心しだいなのです。

自己中心的な仕事のとらえ方から、相手中心のとらえ方に変わるとき、私たちの視野は広がり、仕事に対する新たな意味が発見されるのではないのでしょうか。

# お客さまの喜びを常に考える

さて、ものの見方・とらえ方を相手中心に変えるということは、個人の生き方ばかりでなく、企業の経営にも通じるところがあります。

「経営の神さま」と呼ばれた松下幸之助氏のもとで、二十二年間、直接指導を受けた江口克彦氏（㈱PHP研究所代表取締役社長）は、「松下幸之助は自分の事業を考える時に、まずお客さんが喜んでくれるものはなんだろうかと常に考えた」と、『上司の哲学』（PHP研究所）の中で述べています。

そのことを示す一つのエピソードを同書からご紹介しましょう。

——一九七〇年、大阪で万国博覧会が開かれたとき、松下電器は大きな池の中に法隆寺の夢殿を模した美しいパビリオン

を建てた。マスコミでも話題になり、このパビリオンを一目見ようと、多くのお客さんが長蛇の列をつくつたのだった。

ある夏の日、松下は突然このパビリオンを訪れた。そして、別の入り口から入れるにもかかわらず、炎天下の中、お客さんと一緒に長蛇の列に並んだ。二時間かけてやっとパビリオンの中に入ったとき、松下は係の人に、「もっとスムーズにパビリオンに入れるような新しい誘導方法を考えること」「日よけとなる大きな日傘を設置すること」「紙の帽子を作り、並んでいるお客さんすべてに配ること」という三つの指示を出した。

この帽子が話題になった。当然、帽子には「ナショナル」という文字が入る。お客さんはこの帽子をもらい、松下電器





のパビリオンを出てからもかぶり続けていたのだった。その光景を見て、他の電器メーカーの人間は、「さすが松下さんは商売人だ。万博の会場までも宣伝の場に使うとしている」と皮肉を込めて言ったという。

しかし、それは違う。松下は万博の会場を宣伝に使うと思ったのでもなんでもなく、ただ純粋に、並んでくれている

人たちを気の毒に思っただけだった。それが結果として宣伝効果を生んだに過ぎなかった。松下にすれば、炎天下の行列を終えれば帽子を捨ててもらってもまったくかまわなかった。これが松下幸之助の哲学なのだ(抜粋)――

このエピソードからも、「お客さまの喜びを常に考える」という松下幸之助氏の考え方がよく伝わってきます。

# 企業の本質は公にある



さらに、事業経営について松下幸之助氏は次のように述べています。

「事業というものは自分のためにあるものではない。事業というものは従業員のためにある。従業員のためだけではない。これは社会のためにある。国のためにある。そうすると、小さいながら、わが商売というものは、おおよげ公のものである。法的には個人のものであるかもしれない

けれども、その本質は公のものである」

(『社員家業』PHP文庫)

松下幸之助氏の企業経営の基準は、お客さまであり、従業員であり、さらに社会や国でもあったのです。

昨今、日本を代表する名門企業のため重なる不祥事ふしょうじを見るにつけ、経営者の判断の基準が自社の利益中心のものの方から、従業員やお客さまである相手へ、さらに社会といった第三者へも絶えず目を向けていくことが、今後よりいつそう求められていくのではないかと思います。

「事業は自分のためにあるものではない。その本質は公のものである」という松下幸之助氏の言葉は、いつの時代であつても企業経営の原点とも言うべき「きんげん金言」ではないでしょうか。

# 趣味を生かした 社会貢献

最近さいきんは、生涯学習活動が活発になり、趣味しゅみや特技とくぎを生かしたサークル活動が各地さかで盛んさかに行われています。その中で、活動の輪を地域社会へと広げ、よりよい社会づくりに貢献こうけんしている人たちも少なくありません。

和歌山県に住む米倉信治よねくらしんじさん（67歳）を中心とした「ハーブを楽しむ会」のメンバー十数名も、社会に目を向けた活動を行っているグループの一つで、地元観光協会が街づくり事業の一環いっかんとして行って



いる駅前広場の花壇の植え替えボランティアに毎回参加しています。

米倉さんは、県の農業改良普及センターに奉職して、長年、農業や園芸関係の指導に携わってきました。平成八年ごろ、知り合いの医師に勧められてハーブの効用について学ぶようになり、退職後、植物好きのメンバーを募り、平成九年に「ハーブを楽しむ会」を発足させました。

この会は発足以来、ハーブの効用を学びながら、各メンバーが自宅で栽培したハーブを持ち寄り、香りを楽しんだり、ハーブティーを味わうなどの交流を通じて親睦を深めています。またそれだけでなく、地元の病院や各種施設の庭にハーブの寄せ植えをするといったボランティア活動を行ってきました。さらに他にも

何か地域に貢献できないことはないかと行政に問い合わせたところ、現在のような駅前花壇の整備を依頼されたのでした。

昨年秋には、パンジー、ダイジー、ピオラ、テルスター、葉ぼたんなど、数種類の花とハーブ、合わせて約五百鉢とチューリップの球根を七百球用意して、駅前花壇の植え替えが行われました。

季節に合った花の苗を選び、その準備をするのも、造園士として植物や園芸について豊富な知識





と経験を持つ米倉さんの仕事です。

「自分たちにはできることなら喜んでさせていたいですよ」と語る米倉さん。メンバーの皆さんも、「以前は植木が中心に植えられていたけれど、やっぱり色あざやかな草花のほうが、駅を利用する方に喜ばれますね。地元活性化に協力できて、光栄です」と、喜びを語っています。

「地域の役に立つ人間になりなさい。自分を使ってもらえる場があるなら大いに使ってもらって、人のために尽くしなさい、というのが私の父からの教えです」

そう話す米倉さんにとって、植物を通して地域社会に関わる活動を続けていくことが、生きがいとなっています。（モラロジー研究所刊『れいろう』平成十五年十二月

号「イキイキ生涯学習」参照)

趣味や特技は、私たちの人生に潤いを与えます。そして、そこから得られる喜びによって、生きる活力を与えてくれます。その潤いと喜びを自分だけのもの、あるいはサークルに参加するメンバーだけのものと考えるのではなく、より多く

の人と分かち合えたらどれだけ素晴らし  
いことでしょうか。

自分の喜びが周りの人の喜びとなり、さらに社会の喜びとなる。そして、その結果、何倍もの大きな喜びがまた自分に戻ってくる。そうした発想の中に、私たちは  
の真の幸せがあるのではないでしょうか。

## 思いやりの「三方よし」

モラロジー研究所の創立者で法学博士  
の廣池千九郎（一八六六～一九三八）は、

「自己・相手方及び第三者のいづれにも  
幸福を与える」道徳のあり方を提唱しま  
した。このような考え方は、江戸時代の

碩学・石田梅巖（二六八五～一七四四）の經  
営思想にある「三方よし」として知られ

ています。私たちがものの見方・とら  
え方を考えるうえで、とても重要な示唆  
を与えてくれます。

私たちは、とかく自分中心に物事を判断する傾向が強くあります。まずそのことを十分に自覚<sup>じかく</sup>して、自分だけの狭<sup>せま</sup>いものの見方・とらえ方から、周りの人や社会に目を向け、喜びと満足を与えるにはどうしたらよいか、知恵<sup>ちえ</sup>をめぐらしてみようか。

人は一人では生きていくことはできません。どんな人も必ず人との関わりの中

で、お互いに支え合いながら生きています。だからこそ、家庭において、職場において、地域社会において、自分も相手も第三者も共に喜びと満足のある生き方を求めていきたいものです。

身近な人がいちばん喜ぶことは何でしょうか……。その思いやりの心の積み重ねが、きつと新たな世界を開いていくことになるでしょう。

